

仕事の合間にひと時の休息を。 働く人の癒しマガジン

特別号

YELL

癒え～る

～東北にエールを～

2011年3月11日。東日本を未曾有の大地震が襲いました。

ひとつの街をまるごと飲み込むほどの大津波。私たちの住む福島で起こってしまった、原子力発電所の恐ろしい事故。被災地を襲う、物資の不足や寒さ、家族と連絡がとれない焦り。日本じゅうが、不安と恐怖につつまれました。

でも、こんな時でさえ、こんな時だからこそ… 他人への思いやりや優しさを、決して忘れてたりしない、日本の人々。

世界各地からも、温かい応援や日本国民への称賛の声、続々と届けられています。

さて、今号のほっとエピソードは、震災直後に各地でつぶやかれた感動の言葉を、twitterからご紹介です。

「ほっ。」と エピソード。

震災時大活躍だったtwitter。その時つぶやかれた感動をご紹介します。

■渋滞した交差点での出来事

一回の青信号で1台しか前に進めないなんてザラだったけど、誰もが譲り合い穏やかに運転している姿に感動した。複雑な交差点で交通が5分以上完全マヒするシーンもあったけど、10時間の間お礼以外のクラクションの音を耳にしなかった。恐怖と同時に心温まる時間で、日本がますます好きになった。

■父親の行動

1階に下りて中部電力から関東に送電が始まった話をしたら、普段はTVも暖房も明かりもつけばなしの父親が、何も言わずに率先してコンセントを抜きに行った。少し感動した。

■パン屋

昨日の夜中、大学から徒歩で帰宅する道すがら、とっくに閉店したパン屋のおばちゃんが無料でパン配給していた。こんな喧嘩のなかでも自分にできること見つけて実践している人に感動。心温まった。東京も捨てたもんじゃないな。

■スーパーでの出来事

スーパーで無事買物出来ました(´◡`); でもお客さんのほとんどが他の人の事を考えて必要最低限しか買わない感じだったのが感動しました(涙)

■声をかけること

昨日、裏の家の高1になるお兄ちゃんに感動した。家に1人で居たらしく、地震後すぐ自転車で飛び出し近所をひと回り。【大丈夫ですか——！？】と道路に逃げてきた人達にひたすら声掛けてた。あの時間には老人や母子しか居なかったから、声掛けてくれただけでもホッとしたよ。ありがとう。

■開放

昨日、歩いて帰ろうって決めて甲州街道を西へ向かっていて夜の21時くらいなのに、ビルの前で会社をトイレと休憩所として解放してる所があった。社員さんが大声でその旨を歩く人に伝えていた。感動して泣きそうになった。いや、昨日は緊張して泣けなかったけど、今思い出して泣いている。

■コンビニ

停電地区のほとんどの店が店を開けてる中、あるセブンイレブンが店内陳列棚にいくつもろうそくを置いて、営業をしていた。レジが使えないために在庫確認用のハンディで値段確認し読み上げ、もう1人が電卓で計算、もうひとりが懐中電灯で照らす。その状態でレジ2台稼働させていた。感動した。

■避難所

長女いわく、横浜の避難所に向かう時に、知らない人達と声を掛け合い、場所を教え合っていたそうです。普段は冷たいと思っていた他人の優しさに触れ、感動したそうです。日本人のいざという時の団結力を再認識しました。まだまだ日本も捨てたものではないです。

■御殿場で

実際日本すごいよ。昨日信号が一部所も機能していない御殿場市でもお互いにドライバー同士譲り合ってたし、地元のおじいちゃんおばあちゃんが手信号やってくれてたりで、混乱もなく本当感動した。9時間運転してたけど前車を煽るようなドライバーはもちろんいなかったし、みんな譲り合い精神。

■「みんな」

タクシー運ちゃんや電車駅員さんとおばさんと話したけど、みんな遅くまで帰れなかったりしてすごく疲れているのに、苛立つ事なく、言葉遣いもふるまいも丁寧で、逆に気遣われてしまった。「みんな大変だから」という「みんな」って意識があることに感動するし、私も受け継いで大事にしたい文化。



JR貨物、東北行き石油列車に ささやかな応援メッセージ



ガソリンなどの燃料不足が深刻になっている東北地方に向けた、首都圏からの「石油列車」が19日夜、盛岡市の盛岡貨物ターミナル駅に到着した。震災後初めてとなる列車による燃料の大量輸送。18両の貨車でガソリンと軽油計792キロリットルが運び込まれた。

『ガンバレ東北』の文字と共に日本中の皆の思いを載せて走る列車。(写真)

石油列車はJR貨物が運行した。18日夜に横浜市 of 根岸駅を出発。東北本線や常磐線に不通区間があることから、新潟、秋田と日本海側へ迂回し、青森経由で約26時間かけて到着した。到着した燃料はいったん、地上のタンクに移した後、20日朝からタンクローリー車に積み替えて岩手県内などに届けられる予定だ。

日本経済新聞

こころほっと ニュース。

被災地で起こった、勇気が湧くニュースをご紹介します。

日本中が震災の悲しみに包まれる中、ある一人のおじいさんの笑顔が、インターネット上で「勇気づけられた」「感動した」と話題になっています。

震災から3日目。岩手県内で津波に巻き込まれたそのおじいさんと、彼と同じくらい高齢の女性2人の計3名が、自衛隊によって救助されました。

しっかりとした足取りで階段を下りてきた彼は、テレビ局にカメラを向けられると、晴れやかな笑顔を見せて「大丈夫です。チリ津波ときも体験してっから。また、再建しましょう！」と、力強いコメントを返したのです。

チリ津波は、1960年5月に南米チリ近海で発生したマグニチュード9.5を記録した大地震の影響で起こったものです。太平洋をはさんで日本の岩手県や宮城県などの海岸沿いを大津波が襲い、国内で140人以上が死亡しました。

そのおじいさんの言葉の重みと前向きな姿勢に心をうたれ、インターネット上には続々と「かっこいい」「力強い」「泣いた」「感動した」などの書き込みが相次ぎました。

若者たちも「このおじいさんたちの世代が、今の日本を作るためにがんばってきた。今度は自分たちが復興に向けて頑張る番だ」「おじいさん、おばあさん、任せてください」と、力強いコメントを寄せています。

フジテレビ系列で実際に放送されたこのニュースの映像は、動画投稿サイトYoutube(<http://www.youtube.com/watch?v=2zeroCZSrjo>)で視聴可能です。

YELL 気仙沼の蔵元、酒造り再開 「もろみは生きていた」

被災した宮城県気仙沼市で、酒造りを再開した老舗蔵元があるそうです。

「津波を生き延びたこの『もろみ』は絶対に守る」——。5代目社長は「気仙沼の地酒を造り続けることが復興につながるはず」と町の再建に懸ける思いを語りました。

こちらの蔵元の店舗は、国の登録有形文化財にも指定されていたのですが、津波によって破壊されてしまったそうです。それだけではなく、売り上げの大半を占める市内の小売店も、軒並み流されてしまいました。

社長ご自身は、やや高台にある近くの酒蔵に駆け込み、難を逃れたそうです。

しかし、電気や水道などは壊滅状態。酒蔵のタンクには仕込んだばかりの約1500リットルのもろみがありました。

しかし、電気が来ないため温度管理に必要な冷却機が稼働せず、社長は一時もろみを廃棄することも覚悟したそうです。

でも、タンクに耳をあててみると…発酵して気泡がはじける「ブシュッシュッ」という音がしました。

そしてその音は、日ごとに力強くなっていました。

「津波に負けず、よく生きていてくれた。このもろみは気仙沼の復興を願う自分たちの希望そのもの。これだけは絶対、酒にしてみせる」

社員の中には、親や兄弟を失った方もいたそうです。「たかが酒のために続けていいのか……」。

社長は迷いましたが、残った社員には「会社のためではなく、町の復興のために酒を造ろう」と訴えました。

杜氏（とうじ）らは車や酒蔵に泊まり込み、タンクに氷袋を巻いて、発酵を見守りました。

社長は知り合いの建設会社や電気工事業者など、地域の方々の協力を取り付けて、トラックや発電機を調達、新酒の搾り出し作業に備えました。

そして、被災から約2週間。ついにもろみが熟成し、最終工程にまでこぎつけました。

搾りたての新酒を味見した社長は「これまでで最高ランクに近い出来栄え」と目を潤ませていたそうです。

復興への道のりは容易ではありませんが、社長は「全国に通用する気仙沼の地酒を造ることが、町の復興にもつながるはず」と決意を新たにしています。

そして、復興の願いがかなった暁には「被災した気仙沼の人たちと、思う存分酌み交わしたい」と語っているそうです。

日本経済新聞

YELL みんなで分け合えば、できること

首都圏で食料品や日用品の買い占めが問題となっていますが、そんな中ある若手デザイナーが作った「みんなで分け合えば、できること」と題したポスターが、大きな反響を呼んでいます。

「トイレ12ロール → トイレ1000人分」
「ガソリン10リットル → ケガ人を搬送4人」など、買い占めが及ぼす影響を分かりやすく図案化したものです。

16日に公開したところ「素晴らしい」「印刷してコンビニに張ってもらった」「マンション掲示板に張った」といった声が多数上がり、インターネット上で急速な広がりを見せています。専門家も「意義ある行動。今は被災地のことを第一に考え、助け合いの精神で行動すべきだ」と話しています。

現在のところ、実際に不足している物資は、灯油やガソリンなどの燃料類だけであると言われています。これも徐々に輸送経路が確保されてきていますので、冷静に状況を見守りましょう。特に食品は、日本中にたくさんあります。被災地以外の方はぜひ、「いつも通り」の買い物をこころがけましょう。

物資を被災地に回すためではありません。それだけで、不要な混乱を避けることができるからです。

実は、首都圏の物不足の原因は、「被災地に回ったら自分の分がなくなっちゃうかも!」という、人々の「思い込み」以外の何物でもないのです。



参照：twitter

インターネット上で、あるシンガーソングライターの方のコメントが目にとまりました。

「買いしめをしているアナタへ。世の中が平常に戻った時、その大量に余った残り分はアナタの強欲分です。本当に困った人びとの涙分です」

今回の災害のような困難に直面したとき、人間は誰しも、一人では生きていけないものではないでしょうか。それは、いくらモノを持っている人であっても、結局は同じではないかと私は思います。